

# 観光地ルルドにおける ホスピタリティに関する試論

羽 生 敦 子

フランス南西部オート・ピレネー県のルルドは、カトリック巡礼地として知られ多くの観光客を受け入れる。2011年の調査によると宿泊施設数は186軒に上り、パリに続きフランス第二位の地位にある。ルルドに関しては、近年では寺戸淳子氏による秀逸な研究書があり、それ以前にも、とりわけフランスにおいては医学領域、宗教的領域、オカルト領域、歴史的領域など様々な分野で研究されてきた<sup>1</sup>。本研究は、観光地としてのルルドに注目し、オスピタリエ<sup>2</sup>とよばれるヴォランティアの人々と傷病巡礼者間にみられるホスピタリティについて考察する。

本稿では、観光地ルルドの成立やオスピタリエについてエミール・ゾラ (Émile, Zola 1840-1902) の『ルルド』*Lourdes* (1894)、ジョリス＝カルル・ユイスマンス (Joris-Karl, Huysmans 1848-1907) の『ルルドの群衆』*Les foules de Lourdes* (1906)、アレクシー・カレル (Alexis, Carrel 1873-1944)<sup>3</sup>の『ルルドへの旅』*Le Voyage de Lourdes* (1949)<sup>4</sup>、1950年にTrain blanc (ルルド巡礼特別列車) に乗車しルルド巡礼を行ったベルギー人傷病者 A. Philippart による日記『ルルド行きのトラン・ブランに乗って：ある傷病巡礼者の思い出』*En train blanc à Lourdes : souvenir d'un malade* (1950) から検証する。また、近年のルルドのオスピタリエについてはインターネットから情報を収集し考察を行う。

## 1. 観光地 (巡礼地) ルルドについて

### 1) CONTOURS 社の作成した統計資料

2012年のオート・ピレネー県と Les Sanctuaires de Lourdes (ルルド聖域) について CONTOURS 社が作成した資料によると、フランス国内からの来訪者 (巡礼者) が 38% で一番多く、次にヨーロッパからの巡礼者の合計が 58%、そのうち一番多いのはイタリアからの巡礼者であった。近年の傾向としては、アメリカやブラジル、アジアからの来訪者が増加傾向にある。

ルルド観光 (巡礼) の中心は Les sanctuaires de Lourdes (ルルド聖域) である。Basilique de l'Immaculée Conception (無原罪の宿り大聖堂)、Les piscines (沐浴場)、La Crypte (地下礼拝堂)、Grotte des apparitions (出現の洞窟)、Église Sainte-Bernadette (聖ベルナデット聖堂)、Basilique Notre-Dame du Rosaire (ロザリオ大聖堂)、Basilique Saint-Pie X Sanctuaire de Lourdes (聖ピウス X 世地下大聖堂) の宗教的建造物で構成される。巡礼者 (観光者) はそれぞれの施設でミサに出席し、ピシーヌ (沐浴場) で沐浴をすることを目的とする。

運営は、Les sanctuaires de Lourdes (以後、ルルド聖域と記す) 自体であり、フランス教会

(L'Église de France) やローマ教会 (L'Église de Rome) から一切の援助を受けていない、自主管理である。収入のほとんどは、寄付や寄進、かつ運営する書店などの収益からである (年間予算 3 千万ユーロ：そのうちの 19 万ユーロは寄付寄進で、残りが運営するところからの収益)。内訳については図 1 の通りである。

寄付 62%  
 宿泊, 飲食 13%  
 傷病巡礼者の宿泊 10%  
 商業活動 15%

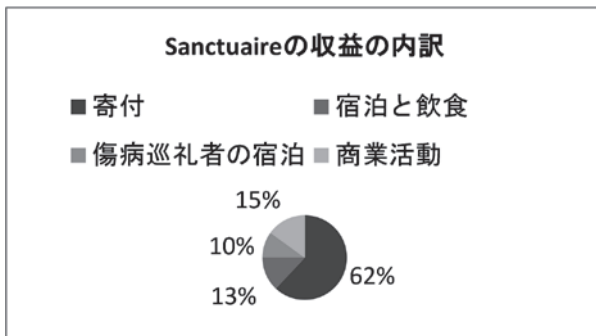


図 1 ルルド聖域の収益の内訳

出典：Dossier de présentation 《Lourdes lève le voile》2012 service communication des Sanctuaires より作成

ここではルルド聖域を運営するための経済活動のみが行われている。2011 年の予約状況であるが、巡礼者全体の内訳は若者が 116,132 人 (前年比 45% プラス)、<sup>5</sup> オスピタリエが 87,452 人 (前年比 8% マイナス)、傷病巡礼者が 53,582 人 (前年比 10% マイナス)、神父 (prêtres) が 13,541 人 (前年比 8% マイナス) であった。

## 2) 旅行者から旅行者へのホスピタリティ

傷病巡礼者の世話をする「オスピタリエ」も巡礼者の重要な構成要素である。巡礼観光地ルルドの特徴は、主なゲスト (= 旅行者) である傷病者とかれらを介助するオスピタリエ (ホスト) の存在であり、かれらがともにルルド聖域の中を巡礼する姿にある。傷病巡礼者にとって、オスピタリエからのホスピタリティがなければ、ルルド巡礼は成立しない。Gouirand (2011) は、「もてなしを受ける者は弱者であり、『外』の世界を表象する見知らぬ人 (ホスト) によって不安になり、身構えてしまう。元気づけられたり、安心させられたり、援助されることが必要なのだ。」<sup>6</sup> とホスピタリティの必要性について言及する。

外部とのコンタクトを持たずに生活する傷病巡礼者にとって、身体的介助に加え精神的な介助も必要であり、オスピタリエの担う役割も大きい。しかしながら、ルルドにおいては、介助する、つまりホスピタリティの提供者であるオスピタリエ自身も外部からのゲスト (= 旅行者) である。

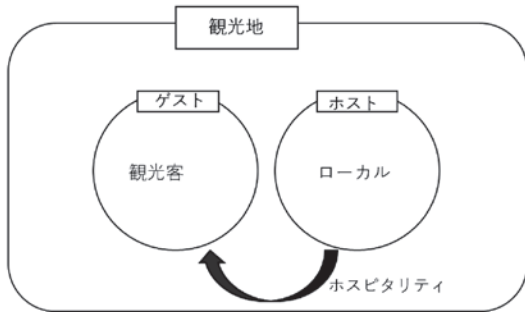


図2 観光地におけるゲストとホスト

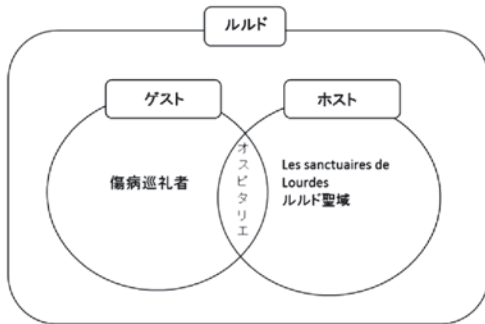


図3 ルルドにおけるゲストとホストとオスピタリエ

図2で示したのが、通常、観光地におけるゲストとホストの関係である。一方でルルドの場合、図3のように、ホスピタリティ提供者であるオスピタリエがゲストとホストの間にあり、ホスピタリティの主体が不明瞭な複雑な体系をしている。無償の活動をするためにルルドへと毎年、何十年にもわたり通い続けるオスピタリエの存在は傷病巡礼者にとって不可欠なホストであるが、ルルドを観光地としてとらえる場合は観光客のひとりである。ルルドは観光的なホスト・ゲストの関係が脱構築された例と言えよう。

### 3) 近年のルルド

図4が示す2001年から2011年までの数値からは、近年ルルド巡礼参加者に減少がみられる。傷病巡礼者の数はマイナス17%という結果が報告されている。

## ルルド傷病巡礼者の訪問数の推移

Total des pèlerins malades à Lourdes

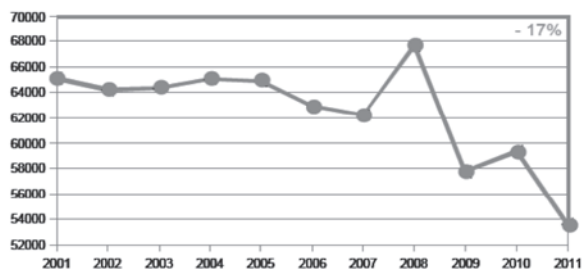


図4 出典：communiqué de presse des Sanctuaires de Lourdes 2011

2018年は1858年のルルドのマリア出現から160年目の年であり、ルルド市においては、図5のように160 ans d'émotions（感動の160年）のスローガンを掲げ、さらなる観光誘致を行っている。ルルド市とルルド聖域の関係については、聖域はタルブ司教区の所有地<sup>7</sup>、つまり「独立した」地域であり、ルルド市に属してはいない。

しかし、Chevrier (2016)<sup>8</sup>も言及しているとおり、巡礼地ルルドの発展が地域に貢献したように、これからも巡礼はあらゆるレベルにおいて地域の向上に貢献する事象であることから、地方自治体としての市とルルド聖域が共同で誘致を行っている。



図5 ルルド観光局によるマリア出現160周年のロゴ<sup>9</sup>

## 2. ルルドの歴史

### 1) マリア信仰と奇蹟

1858年の2月から7月、喘息を病む14歳の少女ベルナデット・スビルー（1844-1879）に聖母が18回にわたり出現した。当初は誰もベルナデットのことを信じる者はいなかった。出現はすべて同じ洞（マサピエル）で起こった。出現時、彼女一人の時は一度もなく、一度目は、友人と妹と一緒に、二度目は出現の話に興味をもった20人くらいの娘たちと、3度目はルルド

の町の上流の婦人二名（一人は聖マリア会の会員）、次は近郊から多くの人と、このようにしてマリア出現の話は広まった。ベルナデット自身は、「白い貴婦人」の存在が聖母なのか聖母ではないのかわかっていなかったが、とにかく司祭に「彼処に御堂を建つべきことを司祭に告げよと妾に命じ給いたることのみ」と伝えた。数日後、あらゆるところからマサビエルに人がベルナデットの祈り姿を見るために集まった。「貴婦人」はベルナデットに「吾娘よ、泉に往きて水を飲め且つ洗えよ」と伝えた。ベルナデットは指示に従い洞窟の底に行ったが、泉はなかった。そこで手で、小さな穴を掘ると、水が湧き出始めた。言われた通り、水を飲んだ。「ルルドの奇蹟」の歴史が始まる。最初の事例は、作中中に右目を負傷し、医者からは不治の病とされた石切工夫が、ルルドの水を、失明した眼につけたところ、何か不思議な動揺を眼中に覚えた直後、治ったことである。医者もまた「これこそ疑いなき奇蹟である」と認めた。その後も奇蹟が起こったために、ルルドの町では大評判になった。（田隅，2015 他）

## 2) 観光地化

スペイン国境まで 50 キロの山中のオート・ピレネー県の小さな田舎町だったルルドは 1858 年の「マリア出現」以来、「マリア信仰」「奇蹟」の巡礼地として一気に観光地化する。1866 年ルルド駅が開業し、1873 年には傷病者のための列車によるルルド巡礼が聖母被昇天会により催行される。パリから 30 時間以上の長旅であった。フランスには、イギリスのトマス・クックのように団体旅行を企画し、近代ツーリズムの幕開けを担った人物を見ることがないが、Train blanc（トラン・ブラン）とよばれた特別列車によるこのルルド巡礼が、フランスにおけるツーリズム、あるいはマス・ツーリズムの嚆矢なのではないだろうか。Train blanc で運ばれた旅行者たちによって、ルルドは 19 世紀の発明品である万博会場<sup>10</sup>、あるいは百貨店のように、群衆（Foule）で満たされていった。

1861 年にタルブ司教区はマリア出現のあった洞窟を購入し、以後少しずつその周辺の土地を取得していった。ルルド発展のキーパーソンとなるローレンス司教（Bertrand-Sévère Laurence, 1790-1870）<sup>11</sup>によって設立された慈善団体 L'Œuvre de la Grotte の媒介があったと言われる<sup>12</sup>。以後、この組織により、ルルド聖域を囲む土地の一画が、カルメル会、ドミニコ会、聖母訪問修道会、聖母被昇天会に与えられ、同時に商業活動が規制された。実際 1860 年代になると、宿泊施設や土産物店の営業が始まっていたのだが、前述のように司教区が土地を独占していたため、ルルド聖域内ではなく聖域へと続く 2 本の道沿いに、商業施設は集中することになった。ベルナデットの兄弟もまたホテル経営に乗り出していたほどであった。（Chevrier, 2016）ゾラは『ルルド』の中で、ユイスマンスは『ルルドの群衆』の中でルルドの急速で安易な商業化について描写し、憂いている。また、周囲にガヴァルニー園谷<sup>13</sup>などの景勝地や、ナポレオン三世やユージェニー皇后に好まれたコートレなどの有名な温泉保養地があったことも、ルルドが巡礼地（観光地）へと発展した理由のひとつであろう。

## 3) 小説『ルルド』 Lourdes に描かれる観光地化の進むルルド

ゾラの小説『ルルド』では、観光客と巡礼者であふれる様子や、かれらをターゲットとした観光ビジネスの隆盛を見ることができる。

道の中央でぐずぐずしていた5人の散策者たちは、危うくひかれそうになっていた。広い道では、馬車が途切れることなく、とりわけ大きな隊列に導かれた4頭立てのランドーが次々に到着していた。馬車の鈴が陽気に鳴っていた。すばらしい天気にとりし、数時間の馬車の旅で浮かれているのはポーやパレージュやコートレからの温泉保養客、ツーリストたちであった。かれらは洞窟、大聖堂をリゾート着で走り回っていた。それから笑い声をあげながら、それらを見たことに満足して帰っていった。<sup>14</sup>

夜のろうそく礼拝行進の参加者については、

会話はまず、この天気のおかげで素晴らしいものになる夜のろうそくを灯した礼拝行進について始まった。5万人以上の外国人がルルドにいた。散策者たちは、近隣すべての温泉保養地から来ていた。そういうわけでホテルの会食用テーブルに人があふれていた。おそらく、町にはパンが足りなくなるであろう。前年のように。<sup>15</sup>

ゾラの『ルルド』の中では、観光地化されたルルドを象徴する「土産物屋」の描写が多い。数珠やメダイユ、マリア像など宗教的な物品を販売する店が乱立する様子から、宝石店やマガザンド・ヌーヴォーテ（新物店）<sup>16</sup>、マリア像が缶に描かれたルルドの水のキャンディなども販売されている様子が描かれる。<sup>17</sup>

ルルドの泉こそが奇蹟への媒体である。ルルドでは水筒が販売され、泉の水を持ち帰るのが「みやげ」のひとつであるが、ゾラが訪問した1891年においても、瓶詰された水の販売は盛んで、地方発送も行われていた。近代化された発送システムと魔術化された聖水とのギャップがルルドの町、産業の発達と宗教の復活性が共存するという特異性を示している。また、ろうそくに関してはその消費量についても「ろうそくの生産量がすべてのビジネスを回しているほどだ」<sup>18</sup>と表現されている。

#### 4) 交通インフラ：鉄道

マリア出現の後、ルルドが飛躍的な速さで巡礼地として発展した大きな理由として鉄道という交通インフラがある<sup>19</sup>。フランス第二帝政期（1852-1870）においてサン・シモン主義者であるペレール兄弟<sup>20</sup>を筆頭に、鉄道への投資が盛んに実施されていた。南仏の鉄道網を担っていた南鉄道（Compagnie du Midi）は、ピレネー地方のタルブ（Tarbe）とポー（Pau）間の鉄道の開通を予定していたが、ルルドでのマリア出現による巡礼者の増加を見越して、遠回りをするようになるが、ルルド経由にすることを決定した。前述のローレンス司教がこの鉄道路線の開設のために国の組織（Travaux publics）に直訴したという事実もある。ルルド駅は1866年4月に開業した。（Chevrier, 2016: 8）

1866年5月、つまり鉄道の開業から1か月後にはクリプト（地下礼拝堂）が完成し、6000人もの人々で祝った。鉄道によって、ローカルな巡礼地であったルルドが、より広域から巡礼者を集める国際規模の巡礼地へと発展していった。鉄道会社もまた巡礼者のための列車と特別料金を提供した。<sup>21</sup>



## 5) 傷病巡礼者のための特別列車：Train blanc (トラン・ブラン)

巡礼者のための特別列車という発想も、第二帝政期の経済政策を反映した取り組みであろう。巡礼という宗教儀礼も資本社会に巻き込まれていく。一方で、カトリック社会とサン・シモン主義というユートピア思想によって傷病者たちが社会の一員として救済される人道的措置であったと言えるのではないだろうか。次に Train blanc 内の様子についての描写をいくつか紹介する。

ゾラの『ルルド』では、主人公の2人、聖職者を辞めたピエールと、ひたすら「奇蹟」を求める少女マリーはもちろんのこと、司祭、傷病者たち、シスター、オスピタリエのまわりで、祈りの歌声が昼夜繰り返されるのが印象的である。列車内のスケジュールが予定されている。

朝から、時間ごとに決められた信仰のお勤めが正確にこなされていく。すべての祈り、祈祷、賛美歌が終わったときが一日の終了なのであった。食事の前に短時間の休憩時間はあったが、とはいえ、彼らはそれ以外すべきことを知らなかった。<sup>22</sup>

また、『ルルド』では、瀕死の巡礼者も Train blanc に乗車している。ルルド到着前にひとりの傷病巡礼者が死亡するという悲劇も設定されているが、この特別列車に乗車できたことが巡礼者にとってすでに「奇蹟」であった。この小説内でのパリからルルドまでの所要時間は22時間以上の長旅であった。

1950年代にベルギーから Train blanc でルルド巡礼した Philippart の日記の中でも、「スケジュールに従って御祈祷を唱えた」<sup>23</sup>と、祈りの歌声(chapelet)の様子が記述される。

実際、現在の特別列車においても、車内でのミサは必須であり、特別な音響システム装置が施されている。<sup>24</sup>

ゾラは Train blanc が、「お楽しみの観光列車」でないことを見せつける。

それは、絶望的な傷病者を乗せて走る病院であった。人混みの喧騒の中、だんだん酷くなる人びとの叫び声を通して、差し迫る恐ろしい死の脅威に晒されつつ、治癒という希望に向かって押し寄せる人間の苦しみ、肉体的苦痛の緩和を求める激しい要求が充満していた。<sup>25</sup>

一方で、傷病者たちにとって、Train blanc に乗ることは、ルルド巡礼を可能にするだけでなく、他者に出会う機会でもあった。自分よりもひどい状態の病人がいると知ること、家族以外の人と会話することなど、社会参加の場でもあった。前述した1950年代にベルギーから参加した巡礼者の文章では、「昨日までは自分のいつもの部屋にいたのに、今はルルドに向かっている」という高揚感とともに、「移動できる」身体が信じられない様子が記述されている。(Philippart, 1950: 50)

Train blanc という鉄道システムにより、ルルド近郊在住の巡礼者の次に、遠方であるパリからの巡礼者が多かったことは、ルルド巡礼の特徴でもある。列車は大量の巡礼者をつぎつぎにルルドへと運び、ルルドは一大巡礼地へと成長する。(A.B.I.I.F)

ゾラの作品では、Train blanc 車中で苦しむ巡礼者の悲惨な状況の描写が印象に残るが、1902年のカレルの旅の描写からはのどかな一面を垣間見ることができる。

この巡礼団はバカンス旅行の列車に似ていなくもない。ただ、品のわるい冗談や歌などはないところが違っていた。ある日焼けした、いなか司祭が車両から車両へ駆けまわっていた。山から出てきた農民の大きなグループの世話をしながら、パンやソーセージや、ワインのラッパ飲みなど一なにかも患者と共にしていた。<sup>26</sup>

現在の Train Blanc の様子については、現地調査の上、次の論考で報告したい。

### 3. オスピタリテについて

フランス語 *Hospitalité* は 1206 年に初出が確認される (*Le Robert* 1985)。修道院、ホスピス (修道院付属宿泊所: 旅人や巡礼者のための施設)、病院において、旅人や貧困者に対して無料の宿泊を提供する慈善行為であった。一方で 1538 年に、古代文明から感化され、これまでとは異なった受け入れの形 (*acceptation*) の中で再出する。オスピタリテとは保護に関する相互的な権利<sup>27</sup>を意味するようになった。Gotman は前者と後者の定義には「一方的か」、「双方向的か」と相反する動きがあることを指摘している。(Gotman, 2008: 1)

また、*Le Robert* (1985) における *hospitalité* の 3 の項目では 1530 年初出として

*le fait de recevoir quelqu'un chez soi en le logeant éventuellement, en le nourrissant gratuitement* (⇒ *hôte*)

(人を) 自宅で受け入れ、場合によっては宿泊させること、無償で食べ物を提供すること  
(⇒ホスト, 主人)

と記載されている。また、ゴットマンによると、今日、ロベール辞書<sup>28</sup>では、慈善、権利、施し、善意という 4 つの制度を引き合いに、それらは私的領域であるとして、オスピタリテと分別する。(オスピタリテは私的領域ではない) 同義語として「もてなし」(*accueil*) および「受容」(*réception*) を掲載している。一方で、ゴットマンによると慈善とは兄弟愛であり、これまで決して十分に強調されていないが、その愛は福音者ルカによって推奨されたように一方向のオスピタリテなのである。(相互的なオスピタリテではない) つまり、混同しがちではあるが、オスピタリテと慈善は別の概念であることをゴットマンは言及する。

繰り返しになるが、オスピタリテとは相互的な働きであり、慈善とは一方的な献身、施しである。本来、オスピタリテとは、同等の身分の人も貧しい人々も、すべての人々が享受するものであった。16 世紀においても、家族、よそ者、貧困者に対し、差別することなく存在した。換言すればオスピタリテはまず、貧しいものに施しをするという聖職的な行為であったということであろう。しかし、しだいに非宗教的な受容 (*réception*) へと変容し、対象が知り合い、つまり家族や友人、身元のはっきりした外国人と限定されている。一方で慈善は、貧しいものや病人、弱者に対しての「施しもの」となる。Gotman は近年の傾向として、物質的なもので表現される傾向にあると分析する。(Gotman, 2016: 2)

小さい社会が主流であった時代は、その中での相互協力、相互援助という行為は生活上不可欠



であったであろう。しかしながら、自分たちの領域が広がり、かつ制限される、つまり「領土」「国」の領域が制定されることは、「内」か「外」、「味方」か「敵」を制定することにもなり、オスピタリテの領域が制限されるようになったのであろう。話はそれるがこれが今日のヨーロッパの移民問題における基本であろう。

ゴットマンは英語の Hospitality について「アメリカ合衆国で、ホテル産業によって使用される商業的ラベルである」と言及するが、日本の「ホスピタリティ」はまさしく、英語 Hospitality と同義であろう。

日本においては、歴史的にみても「他者」の存在が希薄である。異民族による侵略の経験も、異民族による脅威もなかった。アイヌ民族や、士農工商以外の身分など「排除」されていた人々は存在するが、ヨーロッパにおける異教徒や異民族とは異なる。戦国時代の領土の奪い合いの時代を排除すれば、いわゆる「敵」は不在であった。日本には身近な「他者」の存在が稀有だったことが、日本における「歓待」（オスピタリテ）の領域が小さくなった原因であろう。

#### 4. ルルドのオスピタリエ・オスピタリエールについて

ルルドにおけるホスピタリティの場面の中心は傷病巡礼者と介助者オスピタリエの関係であろう。本稿ではオスピタリエに統一しているが、男性をオスピタリエ、女性をオスピタリエールと呼ぶ。また肉体労働を主に担うオスピタリエは、ブランカルディエである。ルルド滞在において「オスピタリエ・オスピタリエール」の役割は大きい。

##### 1) *Le Robert* 辞書 (1985) における定義 Hospitalier (Hospitalière)

・ *Anciennt. Qui recueille, abrite, nourrit les voyageurs, les indigents... (en parlant des religieux et religieuses de certains ordres)*

(古代) オスピタリエ (オスピタリエール) とは、旅人や、貧困者を受け入れる、保護する、食べ物を与える人たち ... (特定の修道会所属の修道者)

・ *Mod. Relatif aux hôpitaux et hospices*

(近代、近世) オスピタリエ (オスピタリエール) とは病院やホスピス関係者。

・ (1488 ; de hospitalité) *Cour. Qui pratique volontiers l'hospitalité*

(通例) オスピタリエ (オスピタリエール) とは人を歓待する人。

ここで、ジャン＝ジャック・ルソー (Jean-Jacques, Rousseau 1712-1778)<sup>29</sup> の言葉が引用される。

Rousseau, *Emile*, V

(…) オスピタリエになる必要が頻繁にないほど、オスピタリエになれる。つまり、歓待する機会が少ないほど、人は喜んで他者、よそ者を歓待するものである。よそ者 (hôte) の数が膨大になると、彼らを歓待することがない。

上記の文章では、オスピタリエの同義語が、ホストであり、hôte の同義語が、ゲストであることに注意を払いたい。後者の hôte には、ゲストとホストの両義性があるが、カタカナ語のホ

ストにはない。このルソーの警句は、近年、アフリカ大陸から押し寄せる移民の受け入れを巡るホスピタリティの問題で、引用されることが見受けられる。

## 2) 属性について

現在では、老若男女を問わずだれでも「オスピタリエ」、「オスピタリエール」に登録できるが、本来は経済活動に関わることのない富裕層（上流階級）の人々の任務であった。つまり、ノブレス・オブリージュとしての慈善活動であった。ルルドの観光地化の歴史で示したように、19世紀の傷病巡礼者は「奇蹟」を求め、ルルドに殺到した。オスピタリエたちは、彼らをルルドにおいて身体的に支え、あるいは、出発地からルルドまでの車内での介助を任務とし傷病巡礼者の援助をしてきた。オスピタリエたちが身体的に接触するのは「傷病者」たちであるが、キリスト教徒の彼らにとって、苦しむ傷病者は「キリスト」であり、宗教的儀礼のひとつとも言えよう。オスピタリエ（オスピタリエール）と傷病巡礼者の間には「相互性」が見られない。つまり、オスピタリテではなく宗教的儀礼としての慈善活動であったのではないか。

ゾラの『ルルド』にみられるオスピタリエの容姿を紹介する。

ブランカルディエの3つのチームがそこにいた。あらゆる階層の男たち、とりわけ上流階級の若者が、服の上にオレンジのトリミングをした赤の十字架と、黄色い革のブルテル（サスペンダー）を身に着けていた。多くのものがベレー帽をかぶり、国に（地域に）適した髪型をしていた。<sup>30</sup> 探検に行くような身なりをしたものは、膝までのきれいなゲートルを巻いていた。（…）突然、ブランカルディエたちが挨拶をし始めた。全身を白で固め、優しそうな子供っぽい人の好きそうな大きな青い目をした男であった。それは、バロン男爵だった。トゥールーズの大金持ちの一人で、ノートル・ダム・デュ・サリュの会長であった。<sup>31</sup>

身なりのしっかりした青年たちの集団であることが描かれる。また、1833年にヴァンサン・ド・ポール会（Société de St.Vincent de Paul）を創立したフレデリック・オザナム<sup>32</sup>は会の目的の一つを「富者と貧者が触れ合うことにより、二つの隔たった階級間に、貧者にたいする富者の厚情と富者に対する貧者の感謝の念という形で、社会的紐帯をうまれさせることであった」（寺戸、2006: 217）とした。

一方で、有名観光地を見るために、ルルドにくるオスピタリエールたちの姿もある。

他のオスピタリエールの女性たちが到着していた。自分の任務に取り掛かろうと急ぐ働きバチでいっぱいの一団であった。混乱の原因でさえあるのだが、彼女たちは上流階級、あるいはブルジョワ家庭出身女性の団体であり、少しの虚栄心が混ざった熱狂が伴っていた。彼女たちは200人以上であった。オスピタリテ・ド・ノートルダム・ド・ルルドに入会すると、寄付をする義務があった。施し物が尽きるのを恐れ、寄付をあえて拒むものもなかった。彼女たちの人数は年々増え続けていた。<sup>33</sup>

彼女たちの中には有名観光地を見るために、ハイキング（ガバルニーなどに）に遊山するオス

ピタリエールも存在するが、終末期に立ちあうものや、汚物の処理をするなど献身的に傷病者の面倒を見る者もいた。

### 3) オスピタリエたちの働く様子

ルルド駅に到着した Train blanc から体の不自由な巡礼者を降ろすブランカルディエ（身体的な介助に携わるオスピタリエ）たちがいる。

それは骨の折れる仕事であった。彼（サバチエ氏）は巨体で、とても重かった。彼はコンパートメントのドアから二度と出てこないのではないかと考えていた。とは言え、彼は入ることはできたのであった。二人のブランカルディエがもう一つのドアを使って順番に試さなければならなかった。やっと、ホームに彼を降ろすことができた。<sup>34</sup>

ルルドに対し冷ややかな視線をおくるユイスマンスも国際巡礼団を迎えた病院「七つの苦しみのノートル＝ダム寺院」では、

多くはフランス語なんてまるで理解しない巡礼者の団体が騒然たる雑居状態に加わる中に—それでも友愛に満ちた規律が守られ、完全な秩序が保持されていることである。きちんと調理された食事が、定時に提供される。自分で食べることができない人たちには、すべて、介助者がつく。告解を聞いてもらいたい病人のために、何人かの司祭たちが待機している。担架係は常時つめていて、病人たちを洞窟へ運んでいき、また運んで戻る。（…）シスターたちには、病院列車の付き添いとしてきた看護婦たち、ルルドのノートル＝ダム教会婦人会の場所ヴォランティアたちが手助けをしている。仕事の分担、苦勞の分担が、なんと賢明な計画にもとづいて立案されていることか。こうした奉仕活動がはじまってから何年もたったのだが、万事はなんの支障もなく運ばれてきた。<sup>35</sup>

とオスピタリエ、オスピタリエールの働きに感心する。

また、カレルは

ルルドでは、病人はあらゆる社会層から集まったヴォランティアの世話になっている。患者をあちこちへ搬送し、沐浴場で沐浴をさせ、洞窟や病院の秩序維持を引き受けて毎年何週間かを過ごす。大巡礼団が来るときは非常に骨の折れる仕事になるが、最大限の献身ぶりで務めを果たしている。ヴォランティアのなかには、純粋な親切心からレラック<sup>36</sup>の仕事をやりにやすくしてくれた人も何人かいた。<sup>37</sup>

と実体験を語る。

さらには、オスピタリエの中のブランカルディエの仕事ぶりを次のように記述している。

この二日間、彼は車内中をまわって病人を運び駅のプラットフォームに降ろし、病院まで運

び、衣服を脱がせ、水浴場で水に浸けてやり、ノミやシラミだらけのぼろ着にも、化膿した血まみれの腫瘍にも、これらすべての崩れかけた体から発散するおそろしい悪臭にも、嫌悪のそぶりさえ見せなかった<sup>38</sup>。

#### 4) 現在のルルドのオスピタリエについて

##### (1) ノートルダム・ド・ルルド・オスピタリテ会 (Hospitalité de Notre-Dame de Lourdes)

「オスピタリテとは、ボランティア（無償）で、巡礼者、とりわけ傷病巡礼者やハンディキャップの巡礼者に仕えること、ホスピタリエになること、それは献身である」

各部署にさまざまな研修が用意されている。出迎え、沐浴の手伝い、食事、トイレの介助などを担当する。沐浴を担当する場合は研修が必要とされ、事前に申請が必要である。申請条件は 1) 無報酬 (Bénévole) 活動であることを受け入れること、2) 18 歳以上 75 歳以下、3) 申請書、4) 写真、5) ID のコピー、6) 推薦状である。ちなみに研修期間は最低 7 日、最長 15 日間と設定されている。目的はキリストへの献身 (Servir le Christ Seigneur) とフランスのため、さらには他者のために尽くすことへの喜び joie を享受することである。(Hospitalité Notre-Dame de Lourdes の HP より)

##### (2) ロザリオ会 (Le Rosaire) の活動

オスピタリエールとブランカルディエたちのインタビューがアップされている。30 年来毎年、オスピタリエールとして奉仕している女性、3 度目という高校生、ブランカルディエ（聖域内で車いすを押すなど、肉体的に奉仕活動をする男性）たちが「体験」について話す。また、ロザリオ会の神父や修道士が、「オスピタリエ」のすべきこと、してはいけないことなどについて語る。(ロザリオ会の HP より)

神父は、オスピタリエと傷病巡礼者は「家族」famille、「親類」cousinage であると言い、オスピタリエが指導的な役割を担ってはいけない、つまり「上」の立場になってはいけないことを語る。オスピタリエールとして巡礼に参加した女子高校生は、「車いすの人と話すときは、屈んで話します。そうでないと、車いすの方は頭を上にもいけないし、首が痛くなってしまいますから。同じ目線で話すことを心がけています」と話す。また、彼女は、「今日は初めてトイレの介助をしました。はじめは不安でしたが、教えられたとおりにやると、うまくいきました。介助される方への尊敬の心は常に必要です」と語っている。また別の女性は、「身体障害者の方への接し方がわからず、特別な眼で見ていたところが今まであったかもしれませんが、この体験のおかげで、一般の人を見る目と同じ視線を向けることができるようになりました。視界が広がりました」と話す。もちろん、キリストへの奉仕という宗教的な満足感を語る女性もいたが、自分の世界観の変化やこれからの職業のための訓練場としてオスピタリエ体験を捉える高校生もいた。神父はまた、オスピタリエへの注意として、日常、友達と家族にするような約束事は容易にしてはいけないと言う。「電話するね」という約束は、ときに傷病者の心を傷つけるからである。双方とも旅行者（巡礼者）であるため、ルルドを離れると、日常生活が互いにやってくる。オスピタリエたちは、忙しい毎日に電話のことなど忘れてしまうことが多い。しかし、ベッドや自宅から離れられない傷病者たちはひたすらその電話を待つことになるためである。それはつまり、

過剰なホスピタリティの危険を指摘しているともいえる。

マルセル・モース (Mauss, Marcel 1872-1950) は、『贈与論』 *Essai sur le don* (1925) の中で、歓待の仕組みを donner (与える) → recevoir (受け取る) → rendre (返礼する) の義務の相互作用とした。あるオスピタリエルは recevoir pour mieux donner (より一層の献身のために受け取る) とこのインタビューの中で答えていた。つまり、彼らにとって donner 「与える義務」の主体は傷病巡礼者であり、受け取り、返すのがオスピタリエという構造が示される。かれらの受け取るものは勇氣 (courage), 善意 (volonté), 幸福 (bonheur), 喜び (joie) である。一般的にルルドのホスピタリティの構造は、オスピタリエが傷病巡礼者たちに奉仕 (servir) する、つまり「与える」行為者であり、受け取る側が傷病巡礼者と理解されがちであるが、実際は二重構造のようである (図 8)。

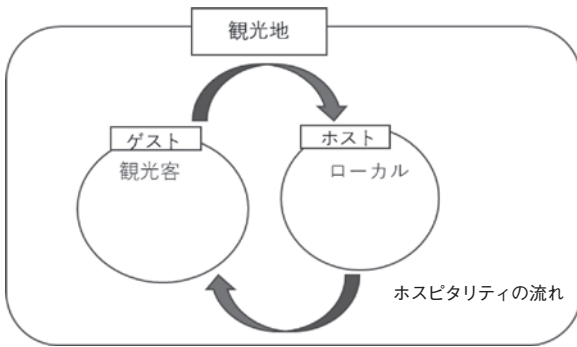


図 6 観光地のホスピタリティの流れ

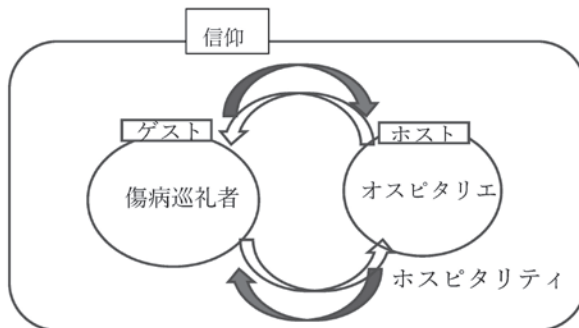


図 7 ルルドの信仰から見たゲストとホストの関係とホスピタリティ

## 5. おわりに

英語の Hospitality, 英語由来でカタカナ表記のホスピタリティ, 日本語の歓待, フランス語の Hospitalité, 一見すると同義語であるような印象を受ける。ギリシャ, ローマ時代の貧困者や旅人への施し, 病人を隔離する場所 (ホスピス) での病人への施しや世話, さらに時代が進み, キリスト教の教えによる慈悲の心と慈善行為を意味することなどが Hospitality および Hospitalité の歩んできた歴史であろう。ロベール仏和大辞典 (1988) では, Hospitalité の最



後の項目 4) に「古代ローマ（個人，家族，都市間の）相互歓待の掟」と書かれている。

また *Littré* では 1) の項目として「古代において，（社会とは）異なる場所に住む二人か数人，あるいは家族，あるいは町全体の中という小さな社会であったが，オスピタリテの名のもとに，旅にいる時は互いに泊め合い，あらゆるもてなしが相互で提供されたこと」と定義している<sup>39</sup>。

つまり，古代においても「相互」がキーワードであった。一方で，キリスト教による慈善行為は，見返りを求めない一方的なもてなしである。これこそが，神との掟なのだが，人間同士の相互作用はみられない。おそらく近代以降，旅の産業化が進むにつれ，施しは「もてなし」へと，つまり，貧しいものを対象とするのではなく，身分が同等の人や，自分よりも身分の上の人，あるいは身元のしっかりした外国人（よそもの）を受け入れるという新しい受容の形に変化したのであろう。しかし，この関係はこれまでのように無償ではなく有償である。この有償のもとでの「もてなし」が，カタカナ語のホスピタリティであり，フランス語においても，英語表記で示す Hospitality であろう。日本語の「歓待」については，この言葉からは相互作用の存在の有無はわからない。むしろホストがゲストをもてなすことが強調されている感がある。適切な和訳を見つけることがこれからの課題であろう。

ゾラの『ルルド』では，男女を問わず，あらゆる年齢，職種，社会層の人々が，Train blanc という狭い空間で「傷病」で繋がる。ルルドに到着した傷病巡礼者たちはオスピタリエたちによるホスピタリティを享受することにより，日々の生活や，聖域内での移動が可能となった。慈善活動を実践する上流階級出身のオスピタリエたちが「与え」，傷病巡礼者が「受け取る」という構図が想像できるが，傷病者たちからの「返礼」も存在したと考えるのが妥当であろう。それは，キリスト教徒としての「喜び」だったのではないか。有産階級の傷病巡礼者は数度もルルドに奇蹟をもとめ来訪するが，ほとんどの人々は一生に一度のことであり，社会との接触をもつ唯一の機会であったに違いない。1950年代の日記からは，「ルルドに行くこと」への高揚感があり，オスピタリエたちの手際の良さに感心する記述が残る。自分の部屋で 365 日を過ごし，自分を移動させることなど周囲の人々に迷惑をかけるばかりだと思っていた青年 Philippart を，ブランカルディエたちはいとも簡単に持ち上げ，列車の乗り降りばかりか宿泊先のベッドまで運ぶ。ルルドに行くことは「外」の社会を知るばかりではなく，自身が社会の一員であることを再確認させる機会でもあった。現在のオスピタリエたちの役割も，無償で病床者たちに奉仕（servir）することにあるが，とりわけ，若者のオスピタリエにとっては自分の将来を考えたいという行動。例えば，公衆衛生や社会衛生学などを学ぶ学生の経験の場として，ルルド巡礼に参加する様子が見られた。毎年参加しているオスピタリエの声からは，傷病巡礼者たちから「返礼」されることの多さが推測できる。「ルルドのウイルス」（Le virus de Lourdes）という言葉がある。オスピタリエとしてルルドに一度行くと，再びルルドに行きたいと思う病である。医療関係者の不在のなかで，西洋文化，キリスト教文化に根付いたホスピスで見られたオスピタリテ（ホスピタリティ）の原型がルルドにはあるのであろう。図 6 で示したのは，観光地での観光者とローカルとホスピタリティの関係図であるが，信仰（Foi）を土台に考えれば図 7 の関係図になり，本稿で焦点をあてたオスピタリテ（ホスピタリティ）の相互性が明白になるのではないだろうか。

一方で，ここ数年，ルルドは巡礼者数の減少を憂いている。その理由は Train blanc の車両の



老朽化、および優先運行されないこと、つまり乗り心地が悪く、長時間の列車の旅は敬遠されているのである。今日、フランス本土の93の司教区のうち、26の司教区のみがこの特別列車を利用している。この状況を打破するために、巡礼に関する司教区長の国立協会（Association nationale des directeurs diocésains de pèlerinage）とSNCF（フランス国有鉄道）が2012年に5年間の期限付きの協定を締結した。車両がTGV<sup>40</sup>仕様になり、快適さは改良されたが、速度は相変わらずのままで優先運行されることはなかった。2018年現在、この協定の更新に関する情報は無いが、新しい幹線（LGV）への投資をすすめるSNCFが今後ルルドへの特別列車に対し関心があるとは考えにくい。ルルド巡礼者の減少を危惧したルルド市長もまた行動を起こしている。2016年、オランダ大統領とヴァルツ首相に、SNCFに新型車両を取り入れるように手紙を出し、新型車両導入はルルドの観光業にのみならず、ベルフォール市にある倒産しかけていた大手の車両製造会社アルストム社の救済にもつながることを強調している。Train Blancの車両の老朽化が問題なのか、交通機関の多様性が問題なのか、理由はさまざまであるが、ルルドを一大巡礼地にした鉄道の役割に変化が到来したようである。

#### 【参考文献】

- A.B.I.I.F. (2015) *La petite histoire des Pèlerinages avec l'ABIIF*, Brice Debièvre 編集 (Association des Brancardiers et Infirmières de l'Île de France)
- Carrel, Alexis (1958) *Le voyage de Lourdes*, Paris, Librairie Plon, 1949. in *Trois Écrivains devant Lourdes*, Paris, Plon, 1958, p.205.
- カレル・アレクシー (2015) (=和訳 田隅恒生) 『ルルドへの旅：ノーベル賞受賞医が見た「奇跡の泉」』, 東京, 中公文庫.
- (底本について、田隅は1950年にアメリカで翻訳された米語訳から日本語訳を行った。ちなみにロンドンで出版された英語訳も存在する)
- Chadefaud, Michel (1981) *Lourdes : un pèlerinage, une ville*, Edisud, Aix-en-Provence, p.123.
- Chevrier, Marie-Hélène (2016) *Pèlerinage, développement urbain et mondialisation : l'exemple de Lourdes*. (電子媒体)
- <http://geoconfluences.ens-lyon.fr/informations-scientifiques/dossiers-thematiques/fait-religieux-et-construction-de-l-espace/corpus-documentaire/pelerinage-lourdes> (2018年10月30日検索)
- Gotman, Anne (2001) *Le sens de l'hospitalité*, Presses Universitaires de France, p.544.
- (2008) *Hospitalité : Vocabulaire et usage*, Diversité (153). (電子媒体)
- <http://www.educ-revues.fr/DVST/AffichageDocument.aspx?iddoc=37584&pos=0> (2018年10月30日検索)
- Gouirand, Pierre (2011) *L'accueil : Théorie, Histoire et Pratique*, Paris, l'Harmattan, p.225.
- Huysmans, J.K. (1972) *Les Foules de Lourdes*, Les Œuvres complètes de J.K. Huysmans XVIII, Genève, Slatkine Reprints, 1972, p.330. (Huysmans 1906年の作品)
- ユイスマンス J.K. (1994) (=和訳 田辺保) 『ルルドの群衆』, 東京, 図書刊行会, p.344.
- Philippart, A. (1950) *En train blanc à Lourdes : souvenir d'un malade*. Louvain, NOVA ET VETERA, p.291.
- 寺戸淳子 (2006) 『ルルド傷病者巡礼の世界』, 東京, 知泉書館, p.556.
- Zola, Émile (1929) *Lourdes*, Les Œuvres complètes d'Émile Zola, Paris, François Bernouard, 1929, p.572. (Zola 1894年の作品)

## 【電子資料】

<http://hospitalite-nd-lourdes.com/> (2018年9月8日検索)  
<http://hospitalite-nd-lourdes.com/nous-soutenir/devenir-hospitalier.html> (2018年9月8日検索)  
<https://www.sncf.com/sncv1/fr/article/presse/trains-de-pelerins/210616> (2018年11月1日検索)  
<https://www.la-croix.com/Religion/Catholicisme/France/A-Lourdes-pelerinage-service-malades-2018-08-13-1200961594> (2018年9月10日検索)  
<https://www.pelerinage-national.org/l-histoire-de-l-hospitalite> (2018年8月30日検索)  
<http://www.lefigaro.fr/conjoncture/2016/09/17/20002-20160917ARTFIG00012-le-pelerinage-de-lourdes-peut-il-sauver-l-usine-alstom-de-belfort.php> (2018年9月10日検索)  
<http://www.pelerinage-rosaire.org/> (2018年8月30日検索)  
<https://www.lourdes-infotourisme.com/web/FR/2433-1858-2018160-ans-d-emotions-a-lourdes.php> (2018年9月10日検索)  
CONTOURS (conseils en Tourisme) 作成 Le poids économique de Lourdes  
<http://www.lourdes-infos.com/65100lourdes/IMG/pdf/pwt.pdf> (2018年9月1日検索)

## 【辞書】

*Le Robert* : Dictionnaire de la langue française (1985).  
*Littré* : Dictionnaire de la langue française par Émile Littré (Edition 1873-1878).  
小学館ロベール仏和大辞典 (1988).

## 【注】

- <sup>1</sup> 寺戸淳子 (2006) 『ルルド傷病者巡礼の世界』, 東京, 知泉書館, p.556. の序論で詳細な研究レビューが行われている.
- <sup>2</sup> 女性をオスピタリエール (hospitalière) と呼ぶ.
- <sup>3</sup> フランスの外科医. 1912年にノーベル生理学・医学賞を受賞. 彼自身がルルドでの「奇蹟」を体験したことにより, 放棄していたカトリックへの信仰が復活し, 自身の体験をもとに小説 *Le Voyage de Lourdes* を上梓した. この小説の中の登場人物 (医者) レラックとは自身の事でもありカレルのスペルの並べ替えをしたものである. 小説の中では Carrel を Lerrac と並べ替えている.
- <sup>4</sup> 本稿においては田隅氏による和訳を引用している. 底本は仏語原典の英語版 (米国版 *The Voyage to Lourdes*) である. カレル自身の原著は Alexis Carrel, *Le voyage de Lourdes*, Paris, Librairie Plon, 1949 であり, 1958年に *Trois Écrivains devant Lourdes*, Paris, Plon, 1958 として再出版されている. カレルのテキストは1902年のルルド訪問直後に書かれたものである.
- <sup>5</sup> 青年カトリック信者が集まるワールドユースデーがルルドから遠距離でもないマドリッドで開催されたため若者の数が伸びたのではないかと推測される.
- <sup>6</sup> Pierre Gourirand, *L'accueil : Théorie, Histoire et Pratique*, Paris, L'Harmattan, 2011, p.12.
- <sup>7</sup> Le statut d'association を与えられた領域である. つまり, 独立した地域であると Chevrier は記述している.

Marie-Hélène Chevrier, *Pèlerinage, développement urbain et mondialisation : l'exemple de Lourdes*, 2016, p.2.

- <sup>8</sup> Chevrier, *op.cit.*, p.6.
- <sup>9</sup> <https://www.lourdes-infotourisme.com/web/FR/2433-1858-2018160-ans-d-emotions-a-lourdes.php> (2018年9月10日検索)
- <sup>10</sup> ユイスマンスも「ここで思い出されるのは、万国博覧会の各国ごとのゾーン、各自がそれぞれの習慣を持ち込み、おのが国の縮図、おのが風習の縮小版をフランスに移植しようとするとりどりのバヴィリオンのことだ」と述べる。J.K. Huysmans, *Les Foules de Lourdes*, Les Œuvres complètes de J.K. Huysmans XVIII, Genève, Slatkine Reprints, 1972, p.156. 和訳(田辺, 1994: 153)
- <sup>11</sup> 1845年から以後ローマで亡くなるまでタルブ司教であった。マリア出現に関する調査を行い、正式にマリア出現を認めるに至った人物。
- <sup>12</sup> Chevrier, *op.cit.*, p.6.
- <sup>13</sup> Cirque de Gavarnie. ビレネー山脈最大のカール。ポー峡谷深部にあり、山々から数多くの滝が流れ落ちる。ヴィクトル・ユゴーも1843年に訪れ、称賛する様子が *Voyage aux Pyrénées* (1843) の中で描かれている。国立公園であり、また1997年ユネスコの世界遺産(自然遺産)に認定されている。
- <sup>14</sup> Émile Zola, *Lourdes*, Les Œuvres complètes d'Émile Zola, Paris, François Bernouard, 1929, p.250.
- <sup>15</sup> Zola, *op.cit.*, p.225.
- <sup>16</sup> magasin de nouveautés 流行のものが売られている店。
- <sup>17</sup> Zola, *op.cit.*, p.458.
- <sup>18</sup> Zola, *op.cit.*, p.245.
- <sup>19</sup> Le chemin de fer a joué, et joue encore, à Lourdes un rôle déterminant, permettant l'essor de la ville en favorisant le développement du pèlerinage (Chadefaud, 1981).  
ルルド研究者 Chadefaud はルルドにおいて鉄道はかつても現在も重要な役割を果たしている、巡礼の発展に寄与しながらまちを飛躍させたのである、と言及する。
- <sup>20</sup> Frères Pereire. 銀行家の兄弟である。ユダヤ人でありサン＝シモン主義者であった。鉄道建設や経営に着手し、1852年にはクレディ・モビリエ銀行を創設。第二帝政期の産業の発達の原動力となった。
- <sup>21</sup> 1938年になると、SNCF(現在のフランス国有鉄道)が引き継ぐ。
- <sup>22</sup> Zola, *op.cit.*, p.90.
- <sup>23</sup> A. Philippart, *En train blanc à Lourdes : souvenir d'un malade*, Louvain, NOVA ET VETERA, 1950, p.66.
- <sup>24</sup> Ils bénéficient également souvent d'un système de sonorisation spécifique permettant la diffusion de musiques, messes ou messages relatifs à l'organisation du pèlerinage. (2016年6月SNCFのサイト Zoom sur les trains de pèlerins より)  
音楽、ミサあるいは巡礼に関連するメッセージのための特別な音響システムを使用することもできる。
- <sup>25</sup> Zola, *op.cit.*, p.26.
- <sup>26</sup> Alexis Carrel, *Le voyage de Lourdes*, Paris, Librairie Plon, 1949. in *Trois Écrivains devant Lourdes*, Paris, Plon, 1958, p.19.
- <sup>27</sup> droit réci-proque de protection et d'abri.
- <sup>28</sup> いつ改定のロバール辞書なのか不明である。
- <sup>29</sup> ルソーは、19世紀ラルースの *touriste* の項目で、最初の *touriste* とされる。彼自身、旅の人生であったが、旅する中で、ホストの態度の変化に気づいたのであろう。18世紀になると、旅、あるいは移動する人々が増加するが、ルソーはホストのモラルの変化を示したのではないか。
- <sup>30</sup> ベレー帽は、ルルドに近いバスク地方の人々が身に着けるものとして知られている。
- <sup>31</sup> Zola, *op.cit.*, p.116.
- <sup>32</sup> 19世紀のフランス・カトリック世界で、慈善がもつ絆を作る力を再評価した。

<sup>33</sup> Zola, *op.cit.*, p.134.

<sup>34</sup> Zola, *op.cit.*, p.125.

<sup>35</sup> J.K. Huysmans, *Les Foules de Lourdes*, Les Œuvres complètes de J.K. Huysmans XVIII, Genève, Slatkine Reprints, 1972, p.65-66. 和訳 (田辺, 1994 : 68)

<sup>36</sup> レラックとはカレル自身のこと.

<sup>37</sup> Carrel, *op.cit.*, p.19. 和訳 (田隅, 2015 : 45)

<sup>38</sup> Carrel, *op.cit.*, p.20. 和訳 (田隅, 2015 : 46)

<sup>39</sup> Chez les anciens, société contractée entre deux ou plusieurs personnes de différents lieux , entre des familles et même des villes entières, en vertu de laquelle on se logeait mutuellement dans le voyage, et l'on se rendait toutes sortes de services.

<sup>40</sup> Train à Grande Vitesse の略, フランスの高速鉄道 .